

真野廃寺出土軒丸瓦の研究

—製作技法を中心に—

岡山 仁美

人間文化学研究所地域文化学専攻博士前期課程

I. はじめに

滋賀県下において、古代寺院跡は60以上存在していたとされ、近年も発掘調査によって新たな事例が数多く報告されている。それぞれの寺院跡において様々な紋様の軒瓦が出土する中で、瓦当紋様の年代差からその製作年代・使用年代・廃棄年代を考えるのが寺院の創建時期・造営期間・廃絶時期を推定する主流な検討方法であるが、近年では瓦当紋様と合わせてその製作技法についても焦点が当てられてきている。

飛鳥における山田寺や川原寺といった寺院の代表的存在および全国的に広く拡散していく瓦当紋様の派生経路については諸先学の研究の積み重ねが数多く存在している一方、中央によって整備される官寺と異なり、それぞれの地域性を色濃く残す氏寺の場合、瓦当紋様だけでは一概にその時期を判断しかねる場合が多い。本稿は瓦当紋様の前後関係だけでなく、軒丸瓦の製作技法にも着目し、そこから地方寺院の創建年代をを求めることを試みるものである。

その試みの具体例として、滋賀県下でも事例が少ないといわれる「嵌め込み式法」を使用した軒丸瓦が出土している、大津市真野に所在する「真野廃寺」について取り上げ、周辺寺院との関連性の中でその年代の推定を試みるのが本稿の目的である。

II. 真野廃寺に関する研究史【図1・2】

真野廃寺は平成21年から平成25年にかけて実施された発掘調査によって初めてその概要が明らかとなった遺跡であり、調査以前は調査区付近における「観音堂」「寺門^{てらかど}」などの小字名や古瓦の散布が確認されるにとどまっていた。また、真野廃寺の存在が想定される場所(大津市真野1丁目・3丁目)は、かつての平安時代において古道(竜華越えより分岐する道と西近江路〔旧北陸道〕)の交差点にあたる位置でもある。松浦俊和氏は大津滋賀郡に所在する白鳳寺院のほとんどが主要街道と間道の合流点か、あるいは道が京都から山越えで大津に入る、その入り口付近に所在することに着目し、「白鳳時代に建立された寺院が平安期の道を意識して造られた」と仮定し、さらにそのことが「白鳳時代にすでにこれらの



図1 本校で取り扱う遺跡

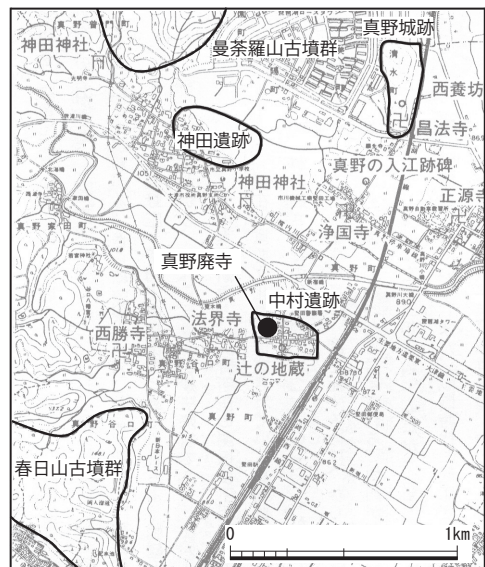


図2 真野廃寺周辺の遺跡(『新修大津市史』に加筆)

道が京都と大津を結ぶ重要なルートとして利用されていたことを示す一つの証拠」となるとしている¹。

真野廃寺を創建し、氏寺とした氏族の候補として、真野臣がその一族としてあげられる。真野臣に関しては諸説があり、真野氏はかつて和邇系氏族の一つとされた小野氏の同族であり、このことは『新撰姓氏録』に記載があることから推測される。注目すべきはその記載の中で、真野氏はもともと朝鮮半島から渡来してきた氏族であったが、675・676年に「庚午年籍」ができたのを機に、和邇部の首長級が「和邇部臣」姓を称することになり、その和邇部臣の一部が690年の戸籍「庚寅年籍」で独立し、「真野臣」が誕生したとする点である²。

また、水野正好氏は真野郷に住む氏族を皇別氏族（和邇系譜に連なる）、大友・錦部・古市郷に住む蕃別氏族（漢王室に出自を求める村主姓氏族を中心とした漢人系帰化氏族）の住み分けについて墓制の観点から検討し、真野臣（旧和邇部臣）の上級官掌者が小野氏であると述べており、真野廃寺（水野氏は「中村廃寺」としている）・膳所廃寺は大友郷内の諸寺に遅れて創建されたとしている³。

志賀の漢人は文献史上において多くの仏教教学・天文学・暦学・陰陽道・医学など多方面に優秀な人物を輩出した実績があり、小野氏とも交流があったとされる。平成27年度の真野廃寺発掘調査（平成25年度まで実施された地域よりさらに北の区画を対象とした）において、脚部に綾杉紋と「九字」が配された円面硯が出土している⁴ことが小野氏と志賀の漢人、そして真野臣の係を裏付けるものとなっている。

Ⅲ. 真野廃寺出土軒丸瓦と関連寺院跡

【図1・2・4 表1・2】

ここでは真野廃寺と合わせて検討する寺院跡として、真野廃寺で出土する軒丸瓦に使用された「嵌め込み式法」とそれに類似する「SR技法⁵」が使用された軒丸瓦が出土する寺院跡、および真野廃寺出土軒丸瓦と同範例が出土するといった関係性を持つ寺院跡である衣川廃寺、穴太廃寺、宝光寺、大供廢寺、大宝寺跡をとりあげる。

真野廃寺

真野廃寺出土軒丸瓦は全部で5種類存在する。「軒丸」の略称として「NM」の略称を用いる。

NM1はいわゆる「山田寺式軒丸瓦」に分類さ

れる、単弁八弁蓮華紋軒丸瓦である。瓦当上半部に沿わせる形で丸瓦のあたる部分を一段くぼませ、丸瓦を当てたのち、補充粘土をあてて接合する印籠継ぎ法が用いられている。瓦当裏面は丁寧になでが施されており、丸瓦凹面の瓦当接合部付近には瓦当面に直交する方向に刻み目が施されている。丸瓦剥離部分を観察すると、丸瓦先端には面取りなどは施されていない。山田寺出土例の製作技法の変遷が適用できるとすれば、奈良時代に入ってから范を再利用して作られ、修理用に用いられた山田寺A種およびC種に相当する⁶。地理的に近接する山背の北白川廃寺系列についての菱田哲朗氏の知見によると、北白川廃寺出土の山田寺式軒丸瓦は丸瓦先端が楔形加工されていることから、山田寺式軒丸瓦の早い段階にあたるものと考え、その実年代を670年代に比定できるとしている⁷。

近江における山田寺式軒丸瓦については、松浦俊和氏が壬申の乱との関わりで検討している⁸。北村圭弘氏は衣川廃寺で出土した山田寺式軒丸瓦（NM7・8・9）を北白川廃寺の早い段階に位置づけられるものとし、さらに蓮子数が1+8である点（NM8）に着目すると、越前の野々宮廢寺出土例などとの関係性が指摘できるとしている⁹。

以上の点を鑑みるに、NM1は山背の北白川廃寺系列の早い段階に位置するもので、瓦当と丸瓦の接合技法（丸瓦を瓦当周縁に沿わず意識¹⁰）および衣川廃寺出土例の同範関係からその年代は670年代以降に比定される。

NM2は素弁十二弁蓮華紋軒丸瓦であるが、近江でも類例を見ない特殊な瓦当紋様をしている。特に外縁部は花卉を意図したような紋様が施されており、その花卉風紋様の一つに「×」印を施している。瓦当部と丸瓦部の接合位置が集中する角度などは特になく、この「×」印がどのような意図で施されたのかは不明である。内縁部はいわゆる細弁系とみられる肉厚な花卉表現となっている。瓦当上半部に沿わせる形で丸瓦のあたる部分を一段くぼませ、丸瓦を当てたのち、補充粘土をあてて接合する印籠継ぎ法が用いられている。瓦当裏面は丁寧にナデが施され、タタキなどの痕跡は観察できない。接合技法・調整技法ともNM1に似通うことから、NM1と同時期か若干下の時期にあったと考え、670年代以降に比定される。

NM3は素弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、衣川廢寺出

土例(NM12)に同範例がある。不整円の中房部に1+6+6の蓮子を配そうとした意図がうかがえる。瓦当内区の剥離面には布目反転痕が一周することから、嵌め込み式法によって瓦当部と丸瓦部が接合されたことがわかる。瓦当裏面は丁寧にナデが施され、タタキなどの痕跡は観察できない。肉厚な花卉表現をみると、衣川廃寺出土NM4に後出すとみることができる。衣川廃寺出土NM4はタタキ調整痕や接合角度の観察から、衣川廃寺出土軒丸瓦第4群に分類される。

NM4は重弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、真野廃寺出土軒丸瓦の中で最も出土割合が高く、主要なものとして製作されたとみられる。瓦当紋様については花卉間に珠紋を配し、周縁もそれほど突出せず、全体的に平坦な表現となっており、突線による花卉・子葉の表現はいわゆる重弁系と分類されるものである。

外縁部が剥離した状態で出土するものが多く、剥離面に布目が一周することからNM3と同じく嵌め込み式法によって瓦当部と丸瓦部が接合されたことがわかる。瓦当裏面には格子タタキが施され、全面に格子タタキが残るもの、格子タタキを下半周縁に沿ってナデ消すもの、全面ナデ調整で仕上げるものの3種が存在する。周縁は素紋だが、一部周縁部に格子タタキがみて取れるものがある。真野廃寺出土丸瓦の広端面に格子タタキが残るものは多くあるので、丸瓦を製造する際にタタキ締めたものと考えられる。

一般に嵌め込み式法は、半乾きにした丸瓦部に、瓦範を嵌め込み、丸瓦部とは別の柔らかい粘土を瓦当裏面側から押し込み、不要な丸瓦部を切り取る(切り取りのタイミングは範に粘土を詰める前という意見もある¹¹⁾ことで瓦当部と丸瓦部を接合する手法である。そして、その際使用する瓦範は、毛利光俊彦氏の分類¹²⁾におけるAタイプ(範端が瓦当側面に及ぶもの)、Bタイプ(範端が瓦当外縁までのもの)、Cタイプ(範端が外縁の内側までのもの)のうち、実用性の問題から原則Bタイプが使用されていたとみられている¹³⁾。

周縁部の高さもさほど突出していない点からも、仮に真野廃寺NM4がタイプBの範を使用していたとすると、半乾きの丸瓦の広端側に範を嵌め、丸瓦の不要部分を切り取り、瓦当裏面側より粘土を補充しタタキ板を用いてタタキ締めるといった工程が復元される。ただ、内区の剥離面に明瞭な布目反転痕が残っていることから、接合時丸瓦が相当乾いて

いる状態にあり、そのような状態の丸瓦部にまで格子タタキが明瞭に残っているものをみると、相当な力でタタキ締めていたのだと想定される。

類似紋様をもつものが主に河内を中心として出土しており、「原山廃寺式」の呼称で知られ、山下廃寺、鳥坂寺などで非常に近似する紋様のものがみられる¹⁴⁾。しかし、この「原山廃寺式」の定義の一つとして「瓦当と丸瓦の接合は印籠継ぎで、丸瓦の接合位置は、丸瓦凹面下部が内区上面あたりにあり、充填する粘土も比較的少ないものを基本とする」としているのに対して、真野廃寺NM4は「嵌め込み式法」によって製作されていることからこの定義には該当しない。ここでは原山廃寺式系軒丸瓦に所属するとしておく。

原山廃寺式系軒丸瓦の特徴として蓮子は1+8で方形に配するものが基本であり、円形に配するものや蓮子数が減少する傾向にあることが挙げられる¹⁵⁾。真野廃寺NM4の場合、1+6の蓮子を円形に配するので、原山廃寺式系軒丸瓦でも後期のものとみなすことができる。上田陸氏の編年案¹⁶⁾でいうところの蓮子数が1+7から1+4へと変化する原山廃寺式ⅡB(7世紀第4四半期前半)とⅠCa(7世紀第4四半期後半)の中間に位置づけられるとみると、およそ683~691年ごろに比定できる。

NM5は単弁八弁蓮華紋軒丸瓦で、NM4と同じ紋様構成をもつが、中房に円形に1+8の蓮子が配される点や全体的にNM4がやや崩れた感じの印象となっているため、NM4の後続と考えてよいだろう(原山廃寺式系軒丸瓦でいうところの「1+8の蓮子を方形に配するもの」には該当しない)。接合方法・調整に関してはNM4と同じだが、瓦当厚は2.6cm前後と薄手のものが多い。真野廃寺出土軒丸瓦に限っていえば、増産を急ぐために印籠継ぎ法よりもより少ない粘土で丈夫なものを製造できると見込んで嵌め込み式法を積極的に使用した可能性が高いのではないだろうか。

以上、真野廃寺出土軒丸瓦について概観してきた。結論として、真野廃寺出土軒丸瓦は大きく2群に分類できると考える。ひとまず瓦当紋様の構成および瓦当裏面調整の特徴から第Ⅰ群がNM1・NM2・NM3、第Ⅱ群がNM4・NM5で、第Ⅱ群から本格的に増産が始まったとみる。

NM1は1+6の蓮子配置と丸瓦の接合技法か

ら山背地域の北白川廃寺との関係、衣川廃寺との同範関係を鑑みるに、衣川廃寺第4群に相当し、創建に際して製造されたものだと考える。

N M 2は製作技法について印籠継ぎ法を用い、調整等の雰囲気もN M 1と似通う部分があり、1 + 8の蓮子を配する点からN M 1に後出するものであると考える。後出するといっても非常に近い時期にあるとみてよいだろう。

N M 3は1 + 6 + 6と3重の蓮子を配するものの、その紋様構成から衣川廃寺N M 4の後続と考え、N M 4・5と同じく嵌め込み式法によって製作されつつ瓦当裏面に丁寧なナデが施されていることから、同じ技法を用いたものの中でも早い段階に属すると考える。

N M 4は寺院創建にあたって第1群の少ない点数をカバーするために増産体制をはかり、嵌め込み式法を採用し、個体によって調整の差異(裏面格子タタキの上からナデを施すか否か)がみられるのも時期差としてとらえられる可能性がある。

N M 5はN M 4の退化形式として、粗雑な作りながらも増産目的で作られたものだとみる。1 + 8の蓮子配置、N M 4よりも瓦当厚が薄く、瓦当裏面に格子タタキがほぼそのまま残る。

瓦に関しては以上の5種類しか出土しておらず、これに後続する文様の軒丸瓦も出土していない。おそらく真野廃寺廃絶後、官寺として再整備などはされず、氏寺としてその機能を終えたとみられる。

衣川廃寺

N M 1からN M 11の11種類に加えて、伝衣川廃寺出土資料として八弁素弁蓮華紋軒丸瓦(以下、仮称としてN M 12とする)を合わせて計12種類もの軒丸瓦が出土している。その製作技法の差異および瓦範範傷の進行具合から4群に大別できるとされている¹⁷。第1群はN M 1・2で、第2群はN M 11の1段階〔以下N M 11- I〕で、第3群はN M 3・N M 11の第2段階〔以下N M 11- II〕で、第4群はN M 4～10・N M 11の第3段階〔以下N M 11- III〕でそれぞれ構成される。

特にN M 11- Iは「瓦当裏面には雑なナデ、瓦当外周下部はヘラ削りするものとナデるものがあり、瓦当外周上部や瓦当裏面の丸瓦接合部の丸瓦側面に細かい平行タタキを施すものが多い」、N M 11- IIは「瓦当裏面には雑なナデ、瓦当外周上部と下部はヘラ削りする(2段階中でも新しいものには瓦当面

に格子タタキが残る)」、N M 11- IIIは「①瓦当裏面と瓦当外周下部ともにヘラ削り調整のもの、②裏面が丁寧なナデ、瓦当外周下部がヘラ削り調整のもの③裏面や瓦当外周下部に格子タタキを残すもの」というそれぞれの特徴を持つ¹⁸。

衣川廃寺出土軒丸瓦の編年観については、瓦当裏面に格子タタキを残す特徴からN M 11- IIIを含む第4群を大津遷都時または直前に位置するものととらえることができ、そこから逆算する形で第2群、第3群を位置づけることができる。N M 1・N M 2から構成される第1群は瓦当紋様、接合技法からみて相対的に古く位置づけられ、これを仮に7世紀第3四半期前半のものとする。

穴太廃寺

宇治の隼上り瓦窯出土瓦との関連性が指摘されるA N M 11 Aとそれに後出するA N M 11 B、周縁に輻線紋を配すA N M 21 AとA N M 21 B、周縁が素紋のA N M 23、中房に花卉を6弁配すA N M 24、南滋賀廃寺系列の川原寺式軒丸瓦とされるA N M 31とそれに後出するA N M 32の計10種類が出土している。その年代観については林博通氏がA N M 11は前期穴太廃寺、A N M 21～24は後期穴太廃寺創建寺院および再建寺院、A N M 31・32は後期穴太廃寺再建寺院に用いられたものとしている¹⁹。

穴太廃寺の造営時期については諸説あり、再建金堂の瓦積み基壇に用いられた紀年銘瓦の「庚寅」が630年か690年を指すのか、西側の瓦だまりから出土した紀年銘瓦の「壬辰」は632年か692年を指すのかについての見解は、仲川靖氏らによって前者は690年、後者は凸面の格子タタキ調整から692年のものであると結論付けられている²⁰。

穴太廃寺出土軒丸瓦の年代観については、A N M 11 A・Bは紋様構成と製作技法(瓦当裏面の丁寧なナデ調整、接着法)からみて定説通り7世紀第2四半期前半とみる。A N M 21～24は後期穴太廃寺創建時期とみられる大津遷都直前の7世紀第3四半期前半とし、A N M 31～32は後期穴太廃寺再建時期を7世紀第3四半期後半とみてその時期に該当するものと仮定する。

宝光寺

周縁に輻線紋を施すI Aa類と素紋のI Ab類、中房に1 + 8の蓮子を方形に配すI B類、弁尖に稜線の残るI C類、二十六弁かつ周縁に鋸歯文を配すI D類、大津廃寺と同範品とされるII A類、周縁

が剥離して出土したⅡB類、同一範でありながら印籠継ぎ法と嵌め込み式法が併用されるⅡCa・b類、3弁を1単位とした蓮弁を十字に配し、その間に小型の蓮華紋を4個配すⅢ類の計9種類がある。報告書によれば宝光寺の創建は667～672年の大津遷都時またはそれに近い7世紀第3四半期とされ、ⅠAの輻線紋については穴太廃寺AN M21・22との関連性が指摘されている²¹。後述するが、花卉の様相については衣川廃寺NM 5および大供廃寺A類との関連性が指摘できる。

出土軒丸瓦の年代については、ⅠA類を最古相(7世紀第3四半期前半)とし、それに平行またはやや遅れる時期(7世紀第3四半期後半)にⅠB・ⅠC類が位置し、ⅠD類は中房・内区サイズが大きめであるのに加え粗い線鋸歯文が施されることから、さらに時期が下る(7世紀第4四半期前半)ものとする。ⅡA類については大津廃寺の同范関係²²と、中房・内区サイズが大きめであること、蓮子に周環表現がみられ、かつ1+5+11の3重の蓮子配置などから最も後出するものとする。ⅡB・ⅡCa・ⅡCb類については、北村圭弘氏が瓦当紋様から先後関係について考察している²³のに従い、ⅡB類は穴太廃寺AN M31とAN M32Aの中間に位置し、ⅡCa・ⅡCb類はAN M32Bより後出するものとしてとらえる。

大供廃寺

素弁八弁蓮華紋のAa類(重圏紋)・Ab類(素紋)、肉厚な弁をもつB類、比較的扁平な紋様表現のCa類(素紋縁)・Cb類(三角紋)と、「細弁」と称される十弁蓮華紋軒丸瓦のD類、複弁のE類、単弁のF類の計7種類が出土しており、A～D類までは重岡卓氏が大宝寺、日置前廃寺と合わせて編年を行っている²⁴。重岡氏によれば、Ab類は7世紀第3四半期に入っところに大供廃寺創建に伴って製

作され、それに続く形で天武朝に入ったあたりでB類が出現する。8世紀に入り、再整備された大宝寺に使用された細弁式の大宝寺Ⅳ類A種が退化して周縁が素紋となったものが大供廃寺D類であり、それが退化・派生したものを大供廃寺C類としている。特に、大供廃寺C類はその紋様表現から奈良時代に時期比定されるとしている。

大宝寺

V字状断面をもつ素弁八弁蓮華紋のⅠ類の存在から、飛鳥時代に創建されたとされる大宝寺だが、最近ではこのⅠ類について北村圭弘氏が河内九頭神廃寺との関連性を提示している²⁵。ここでは接着法を用いている点から従来通り7世紀第3四半期前半までさかのぼるものとして時期比定しておく。Ⅱ類について重岡卓氏はⅠ類に後出するものとして時期比定しており、この時点でSR技法が大宝寺で採用されているとする。そして近江において早期に創建された大宝寺は、8世紀に再整備され、細弁系のⅣ類A種・B種が製作されたとしている。仮に重岡氏の編年に従うと、SR技法は軒丸瓦Ⅱ類において7世紀第2四半期に用いられ、それが8世紀初頭の再整備時の軒丸瓦Ⅳ類においても使用されていることになる。

Ⅳ. 製作技法・瓦当紋様の類似性について

検討対象とした寺院において出土した軒丸瓦の特徴として特筆すべき要素を挙げていく。製作技法上の特徴として「瓦当裏面に残る格子タタキ」、「嵌め込み式法とSR技法」、瓦当紋様の特徴としていわゆる「豊浦寺式系紋様の分布」の計3要素が挙げられる。

①瓦当裏面タタキ

瓦当外周部および瓦当裏面に格子タタキの残る点は、大津宮関連寺院に共通する特徴とされている。

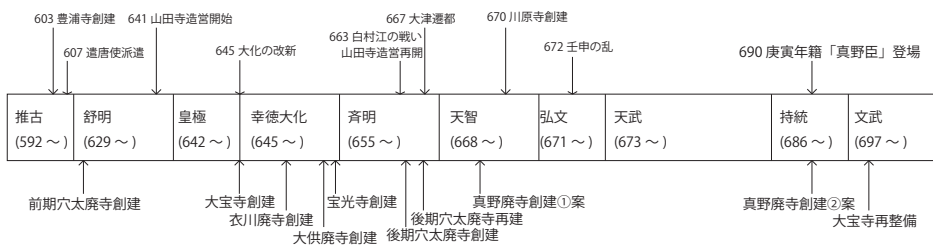


図3 検討対象時期の主な出来事一覧(各寺院の造営時期(想定)については表1・2に準拠した)

表1 軒丸瓦観察表(法量単位はcmとする)

○:出土点数多数を占める
▲:少数が存在する

Table with columns for classification (分類), system (系統), time (時期), and various measurements (瓦当径, 瓦当厚, etc.) for 真野庵寺 and 北川磯寺. Includes sub-headers for '瓦当加工' and '瓦当調整'.

Table for 六太磯寺 (Rokutaijikoji) with columns for classification, system, time, and measurements. Includes sub-headers for '瓦当加工' and '瓦当調整'.

Table for 聖光寺 (Seikouji) with columns for classification, system, time, and measurements. Includes sub-headers for '瓦当加工' and '瓦当調整'.

Table for 大供養寺 (Daikuyouji) with columns for classification, system, time, and measurements. Includes sub-headers for '瓦当加工' and '瓦当調整'.

Table for 大宮寺 (Omiya-ji) with columns for classification, system, time, and measurements. Includes sub-headers for '瓦当加工' and '瓦当調整'.

林博通 1989「近江の古代寺院」をもとに作成

表2 各寺院出土軒丸瓦編年案(可能な限り報告書等に準拠した)

西暦	年代	出来事	真野廃寺	衣川廃寺	穴太廃寺	宝光寺	大宝寺	大供廃寺
630	飛鳥				ANM11A			
					ANM11B	前期創建		
640	飛鳥	山田寺造営開始(641)						
		大化の改新(645)			第1群			
650	飛鳥			NM1 NM2			I	
							II	
660	白鳳	白村江の戦い・山田寺造営再開(663)						A
				第2群	ANM21A・B ANM22	I Aa・b		
		大津宮(667~672)		NM11 I	第3群	ANM23 ANM24		I C
670	白鳳			NM11 II NM3	後期創建	ANM31	II B	I B
		壬申の乱(672)		NM11 III NM7 NM5		ANM32A		B
680	白鳳			NM9 NM4 NM6		ANM32B	II Ca・b	
			NM1 NM2	NM8 (NM12) NM10			I D	
680	白鳳		NM3	第4群		後期再建		
690	白鳳	庚寅年籍成立(690)	NM4 NM5					
700	白鳳	大宝律令成立(701)						IV A
710	奈良							IV B
								D
								Ca
								Cb

るが、真野廃寺出土軒丸瓦にもこれがあてはまる。NM4とNM5は瓦当裏面全面に格子タタキが残るもの、格子タタキを下半周縁に沿ってナデ消すもの、全面ナデ調整で仕上げるものの3種が存在する。ただし、前述したようにNM4の製作年代を河内の原山廃寺式系列の紋様形態の変遷の中で7世紀第4四半期中頃とすると、その年代はおよそ683~691年に比定され、真野廃寺の創建年代が大津遷都以降、天武朝期にまで下る可能性が高くなる。

② 嵌め込み式法とSR技法

「瓦当内区部分の剥離面に布目反転痕が一周するもの」を嵌め込み式法、「瓦当上半部に半裁丸瓦をかぶせ、下半部周縁部は別の粘土を用い補充するもの」をSR技法の定義として取り扱う。瓦当部の破損状況により一見して判別が難しいものもあるが、筆者は遺物実見および報告書を参照した結果、大供廃寺(A・D・Ca類)・大宝寺(II・III・IV類)・穴太廃寺(ANM31)・宝光寺(II B・II Cb)出土軒丸瓦にSR技法(個々の調整の差はある)が用いられ、真野廃寺(NM3・NM4・NM5)・衣川廃寺(NM12)出土軒丸瓦にのみ嵌め込み式法が用いられていると判断した。

それぞれの製作技法について概説しておく。

大供廃寺(A・D・Ca類)、大宝寺(II・III・IV類)

瓦当上半に丸瓦をかぶせ、瓦当下半は別の粘土を補充して接合する。瓦当上半の丸瓦剥離部分にのみ布目反転痕が残ることから、SR技法と判断する。

穴太廃寺 ANM31、宝光寺 II B・II Cb

瓦当と丸瓦の接合方法は、まず内区に粘土を範詰めする際、外区の周縁側にはみ出た粘土を回転させて削り取り、かなり乾かした後、やや半乾きの粘土をあてがうと同時に丸瓦以外の周縁部に粘土を詰め、裏面全体に粘土を補強するといった方法をとっている。そのため丸瓦接合部分以外の瓦当部下半にしか周縁が残らない状態が観察される。また、周縁全てが外れているものがあり、形状からみると内区は嵌め込み式法にみえる。北村圭弘氏によればこれは嵌め込み式法の技法Aにあたると思われるが、「かなり乾かした後、やや半乾きの粘土をあてがうと同時に丸瓦以外の周縁部に粘土を詰める」点をみれば、これはSR技法に当てはまる。

真野廃寺 NM3・NM4・NM5、衣川廃寺 NM12

瓦当上半・下半を問わず丸瓦剥離部分に布目反転痕が全周する、典型的な嵌め込み式法と判断する。

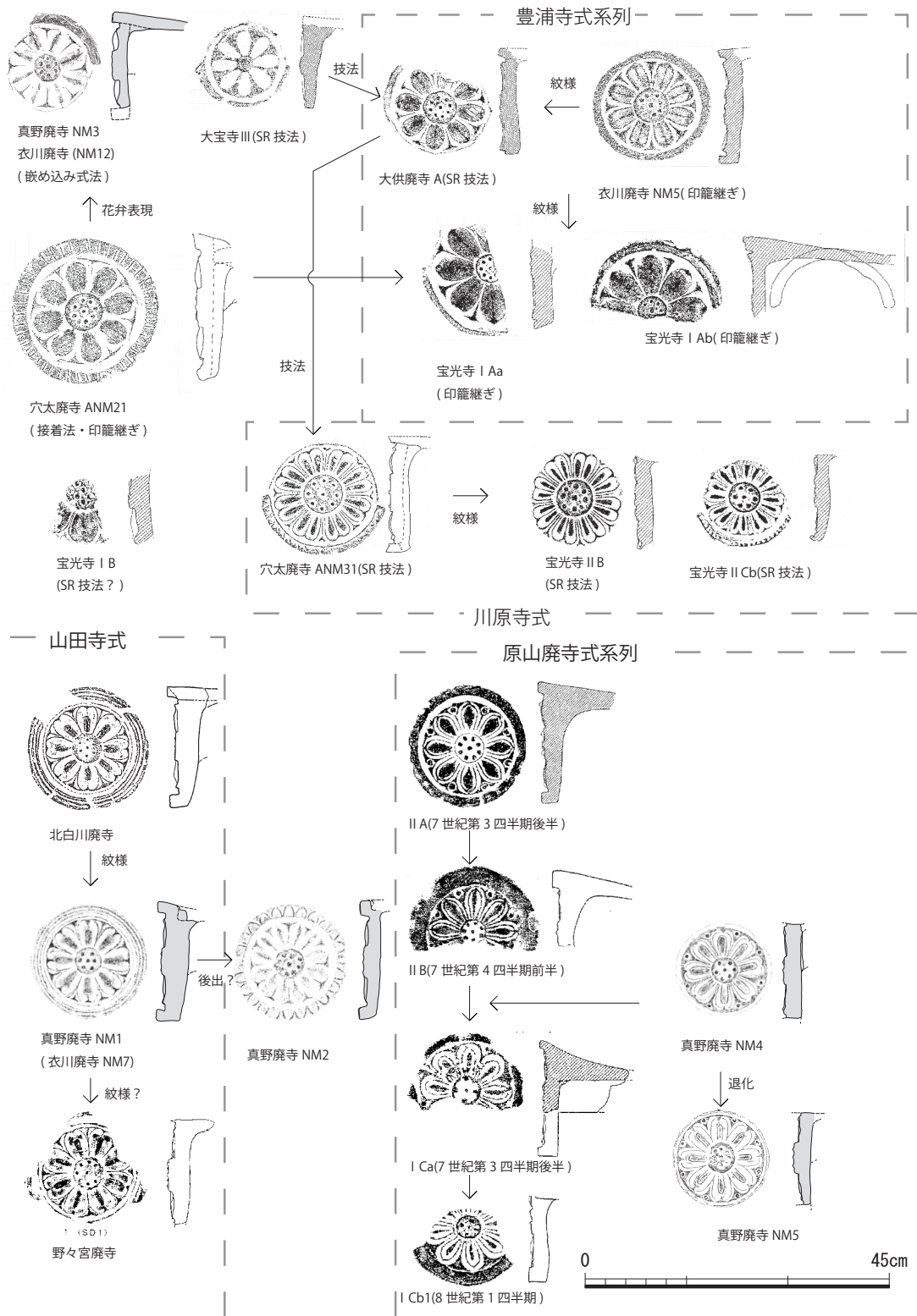


図4 真野廃寺関連寺院出土軒丸瓦の関係性 (S=1/9)

③豊浦寺式系紋様の分布

衣川廃寺 N M 5 や大供廃寺 A 類、宝光寺 I A 類がこれに該当する。宝光寺 I Aa 類については周縁部に輻線紋が施される（輻線紋は穴太廃寺からの影響か）が、全体的な紋様構成としては同系統に分類できる。

以上の3要素から以下のことが考察できる。

穴太廃寺 A N M31 および宝光寺 I B・II B・II Cb 類の川原寺式系列群と大供廃寺 A 類の共通の製作技法である S R 技法については、大供廃寺 A 類と宝光寺 I Aa・I Ab 類の瓦当紋様の類似性からみると、大供廃寺から穴太廃寺及び宝光寺へ伝搬した可能性が提示できる。

真野廃寺出土軒丸瓦に用いられた嵌め込み式法と大供廃寺・宝光寺・穴太廃寺で用いられた S R 技法は「丸瓦を瓦当部に嵌め込む」意識から類似性が見られ、真野廃寺 N M 4・5 および穴太廃寺 A N M31 にみられる「瓦当裏面に格子タタキが残るといった大津宮関連寺院出土軒丸瓦の特徴」に着目すると、両技法に時期差はそれほどないと考えられる。ただし、真野廃寺 N M 4・5 の瓦当紋様が河内の原山廃寺式系列に属することから、全く異なる独自のルートで真野廃寺に嵌め込み式法が伝搬した可能性も存在する。

V. まとめ～真野廃寺の消長～【図3・4 表2】

真野廃寺出土軒丸瓦を中心とした検討の結果として、真野廃寺の持つ特異性が浮き彫りとなった。その特異性というのは、穴太廃寺や大宝寺、大供廃寺との地理的中間に位置するにもかかわらず独自の瓦当紋様として原山廃寺式系を採用し、なおかつ S R 技法とは異なる「純粋な嵌め込み式法」（瓦当内区側面に布目反転痕が一周することで判断）を使用している点である。真野廃寺出土軒丸瓦のそれぞれの系譜を検討する上で、まず衣川廃寺出土のものと同範でもある N M 1 にみるように、竜華越えを経由して北白川廃寺に代表される山背地域との交流が想定される。

そして、真野廃寺 N M 3・4・5 にみられる嵌め込み式法がどこからやってきたかによって真野廃寺の創建年代は変動する。すなわち、大まかに区分すると「壬申の乱以前の天津遷都期」か「壬申の乱後の天武朝期または持統朝期」の2パターンが想定

できる。

①近江において嵌め込み式法が S R 技法から派生する場合

真野廃寺出土 N M 4・5 にみられる嵌め込み式法と、大供廃寺・大宝寺において主流な製作技法とされた S R 技法の類似性に着目する。大供廃寺・大宝寺を経由し旧北陸道を南下するルートで S R 技法が穴太廃寺・宝光寺の工人集団に伝播し、それから真野廃寺に伝搬する過程で嵌め込み式法が派生したと仮定する。その場合、真野廃寺の創建年代は瓦当裏面の格子タタキ調整が最も数多くみられる大津宮関連寺院に追随するとみて、穴太廃寺 A N M31 に後出し、衣川廃寺 4 群の時期に相当すると考えられる。

この場合、「壬申の乱による焼失」が真野廃寺焼失の要因の候補として挙げることができるが、推測の域を出ない。そして、「嵌め込み式法」が近江に限って使用されるわけではなく、河内などでも出土事例がみられることから、「嵌め込み式法」を単なる地域性としてとらえるのは難しいと考えると、この①のパターンの可能性は低いと考える。

②嵌め込み式法が真野廃寺独自のルートで導入され、S R 技法と無関係であった場合

675・676年に「庚午年籍」ができたのを機に、和邇部の首長級が「和邇部臣」姓を称することになり、その和邇部臣の一部が690年の戸籍「庚寅年籍」で独立し、持統朝において「真野臣」となったタイミングで氏寺を創建したと仮定する。この場合、主要瓦の N M 4 とそれに後出する N M 5 を河内の原山廃寺式との関連性から683～691年ごろに比定できることとほぼ一致する。河内をメインに展開する原山廃寺式が瓦当紋様に採用された理由としては、真野臣が独自の交流ルートを持っていたことを彷彿とさせる。

一方、原山廃寺式系列の軒丸瓦に用いられる印籠継ぎ法と違って変わって、N M 4・5 に見られる瓦当裏面のタタキ調整については、衣川廃寺造営に携わった工人が壬申の乱によって衣川廃寺が焼失したのち真野廃寺の工人として再雇用されたこととみることができる。真野廃寺は穴太廃寺や衣川廃寺よりも遅いタイミングで造営が開始されたことになりながら、川原寺式などが出土していない点から官寺に昇格することなく、氏寺としてその機能を終えたこととみることができる。

上記の2パターンのいずれにしても、真野廃寺の廃絶時期については塑像の出土から焼失による廃絶には間違いはないだろうが、そのタイミングは不明である。しかし、近接する中村遺跡の石帯出土例や、真野廃寺推定最北区からの円面硯・奈良三彩出土例などから、真野廃寺の焼失以降は官衙として竜華越えと旧北陸道の結節点を掌握する要衝としてその機能を引き継いでいったとみられる。

VI. おわりに

本稿では、大津市所在の真野廃寺の創建時期・造営期間を出土軒丸瓦の特性について、周辺関係寺院との関わりを検討することによって解明しようと試みた。

原山廃寺式系列に分類される重弁八弁蓮華紋軒丸瓦のNM4の瓦当紋様に着目すると、その創建年代は683～691年に比定できる。しかし、原山廃寺式軒丸瓦に一般的に用いられる技法が「印籠継ぎ法」であるのに対し、真野廃寺NM4には「嵌め込み式法」が用いられていることの相違性にも着目すると、紋様と製作技法がそれぞれ別のルートで伝播した可能性が高いといえる。近江において真野廃寺・真野臣がいかにか特異な存在であったのかが浮き彫りになったともいえるだろう。

謝辞

本稿の作成にあたっては、指導教員である滋賀県立大学人間文化学部地域文化学科教授定森秀夫先生、中井均先生、ならびに遺物実見などにおいて大津市埋蔵文化財調査センター・高島歴史民俗資料館・草津市教育委員会文化財保護課の皆様にお世話になりました。厚くお礼申し上げます。

註

- 1 松浦俊和2003「古道と遺跡—近江国滋賀郡に見る白鳳寺院の分布から—」(松浦俊和『古代近江の原風景』サンライズ出版)。
- 2 山尾幸久1996「第3章 古代社会の展開1 ヤマト国家の時代」(志賀町『志賀町史』第1巻)。
- 3 水野正好1970「滋賀郡所在の漢人系帰化氏族とその墓制」(滋賀県教育委員会『滋賀県文化財調査報告書第4冊』)。

- 4 真野廃寺に近接する中村遺跡推定域において東西300m、南北225m四方の正方位の地割がみられることや古代北陸道の中継点にあたることに加え、大津市教育委員会の調査によると、平成19年度の調査により中村遺跡において石帯が出土しているほか、平成27年度の真野廃寺の調査によって奈良三彩、円面硯が出土していることなどから官衙の存在が示唆されている(2017年3月報告書発刊予定)。
- 5 大脇潔2007「『一瓦一会』瓦当側面接合技法—SR技法—の軒丸瓦について」(阪南市教育委員会『三宅雄一氏・東鳥取小学校・東鳥取公民館寄贈瓦報告書』)において、一般的に知られる「瓦当裏面接合技法」とは異なる技法として「瓦当側面接合技法(Side Round tile)」を提唱した。
- 6 佐川正敏・西川雄大2005「山田寺の創建軒丸瓦」(古代瓦研究会『古代瓦研究Ⅱ—山田寺式軒瓦の成立と展開—』)。
- 7 菱田哲郎2005「山背の山田寺式軒瓦」(古代瓦研究会『古代瓦研究Ⅱ—山田寺式軒瓦の成立と展開—』)。
- 8 松浦俊和2003「壬申の乱と造寺—近江に分布する「山田寺式」軒丸瓦の場合—」(松浦俊和『古代近江の原風景』サンライズ出版)。
- 9 北村圭弘2005「近江の山田寺式軒瓦」(古代瓦研究会『古代瓦研究Ⅱ—山田寺式軒瓦の成立と展開—』)。
- 10 註7に同じ。
- 11 鈴木久男1990「一本作り軒丸瓦の再検討」(京都国立博物館『畿内と東国の瓦』)。
- 12 毛利光俊彦1990「軒丸瓦の製作技術に関する一考察—範型と柳型—」(京都国立博物館『畿内と東国の瓦』)。
- 13 熊本県教育委員会1980『興善寺I—興善寺馬場遺跡調査報告—』、北村圭弘2004「縦置き型一本作り軒丸瓦製作技法とその地域の変容—近江・南滋賀廃寺系列の川原寺式軒丸瓦—」(金沢大学文学部考古学講座『金沢大学考古学紀要』第27号)。
- 14 上田睦2010「河内の重弁蓮華紋軒丸瓦—原山廃寺式を中心に—」(奈良文化財研究所『古代瓦研究V—重弁蓮華文軒丸瓦の展開 藤原宮式軒瓦の展開—』)。
- 15 註14に同じ。
- 16 註14に同じ。
- 17 青山均2000「出土瓦の考察」(大津市教育委員会『史跡衣川廃寺整備事業報告書』pp.51-58)。
- 18 註17に同じ。
- 19 林博通2001「穴太廃寺と大津京」(滋賀県教育委員

- 会『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ—一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う—』。
- 20 仲川靖2001「穴太廃寺における諸問題」(滋賀県教育委員会『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ—一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う—』)。
- 21 草津市教育委員会1987『宝光寺跡発掘調査報告書』
- 22 田中久雄2009「大津廃寺・山ノ神遺跡の出土遺物」(奈良文化財研究所『古代瓦研究Ⅲ—川原寺式軒丸の成立と展開—』)。
- 23 北村圭弘2004「近江・南滋賀廃寺系列の川原寺式軒丸瓦」(滋賀県立安土城考古学博物館『紀要』第12号)。
- 24 重岡卓1994「高島郡の古代寺院」(滋賀県文化財保護協会『紀要』第7号)。
- 25 北村圭弘2011「近江のV字状断面素弁蓮華紋軒丸瓦」(林博通先生退任記念論集刊行会『琵琶湖と地域文化—林博通先生退任記念論集—』サンライズ出版)。
- 26 註24に同じ。

27 註24に同じ。

主要参考報告書

※紙面の都合上一部割愛させていただく

- 大津市教育委員会2014『真野廃寺発掘調査報告書—都市計画道路3・4・21号道路改良事業に伴う—』
- 滋賀県教育委員会2001『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅳ—一般国道161号(西大津バイパス)建設に伴う—』
- 大津市教育委員会2000『史跡衣川廃寺整備事業報告書』
- 草津市教育委員会1987『宝光寺跡発掘調査報告書』
- 今津町教育委員会2004「滋賀県高島郡今津町 大供廃寺遺跡発掘調査概要報告書—今津大門地区の調査—」『今津町文化財報告書第30集』

Comment

定 森 秀 夫

人間文化学部地域文化学科教授

岡山仁美さんのこの論文は、2014年度卒業論文をもとにしているが、修正とその後の検討結果を反映した新稿とも言うべきものである。岡山さんは学部生の時から大津市教育委員会の発掘調査に参加し、中でも本論文のテーマである真野廃寺の発掘調査に多く関わりその整理作業にも携わってきた。真野廃寺出土の瓦に関しては、実物と向き合ってきただけに詳細な観察がなされ、その検討から真野廃寺の創建・廃絶時期、寺の性格など岡山さん自身の考えが形成されてきた。本論文は岡山さんの現時点での到達点でもある。

特に、製作技法の嵌め込み式法に着目して、その嵌め込み式法が大津市の真野廃寺など数箇所寺院跡に導入されたルートなどに対して検討を加えている。これまでの一本作り技法から嵌め込み式法が派

生したという考え方に対して、新たな視点で嵌め込み式法を考えるべきことを指摘している。ただ、嵌め込み式法が具体的にどこから導入され、なぜ真野廃寺などに限定的に導入されたのかなどは解明が難しいようで、今後の資料の増加、嵌め込み式法の瓦を出土する他地域の寺院跡との比較、さらには本論文で使用した資料の再検討などによって、研究は進展していくものと思われる。

真野廃寺出土瓦に対する検討は、発掘調査報告書以外にはおそらくこの岡山さんの論文が初めてであり、今後の湖西における古代氏族の考古学的研究に資するものと思われる。2017年度には修士論文の提出が予定されており、指導教員としてはどのように自説を発展させ展開していくのか楽しみである。